



お返しのころ

世界一の大国アメリカのトランプ大統領の発言に、国際社会は大ぴらに「自国第一主義」を躊躇しなくなってきました。しかし、いくら経済が豊かになっても、生命の源であるこの地球上に共存してきた数多くの生物の一種にすぎない人類が、それだけでは存在できないことには変わりはありません。そして唯一人間だけは本能だけで生命を全うすることのできない生き物であり、それゆえに宗教が生まれ、思想、哲学、道徳を必要としてきたのです。

しかし、豊かな生活を求めてきた親たちが子を育て、またその子が成長し子を育て要求することを教える、その子も成長して次の子供に要求を教える、世界がそのような考え方に支配されるようになって何代にもなります。

その結果が、共存しなければ生命を保てないという生物の本質を忘れた「自分ファースト」の世界ではないでしょうか。

* * *

宗教とは、多くの生命が繋がることによって恵みをもたらし、繁栄し、生かし合っているものだということを感じさせてくれるものです。その自覚のもとに生きてゆく人生を導くものとし

て宗教は生まれたのです。

人類の発生とともに生まれた原始宗教と言われるものは、自然を敬い大いなるものを感じ取り畏敬の念を大切にすることでした。そのことを子孫に伝えていったのも、生物として生命が繋がっていくことを何より願ったからでした。

そして人間が悟って仏になられたことによって生まれた仏教は、人間であるが故の逃れられない苦悩の解決へと向かいましたが、やはりその悟りの根底に流れるものは生命の平等でした。

「こんなものは無駄なものだ…」を、「他から見れば自分もそうかもしれない…」と気づかせる智慧を与え、独りよがりの傲慢さを鎮め、すべてをほとけの世界であると説くものです。

* * *

先月のご法座にお迎えした早島先生から、「人間を作り上げている細胞はすべて解明されており、その一つ一つを作り出すことも可能になっているけれど、それがあからといって決して生命は生み出すことはできないのですよ、あのips細胞も生きています生命からしかできないのです」とお聞かせいただきました。

どんないのちも生命でしか生み出せない、だから殺してはならない尊いものなのです。道端の小さな草も這う虫も繋がって

生きとし生けるすべての生命を育くみ、私のいのちにも繋がっている、そのことを自覚して生きる、それが仏教の「和」の教えであり「不殺生」の教えとなり説かれているのです。

仏教の原点は、他の生命をいただいでしか生きられない悲しみとすまなさの心です。「殺してはいけない」とは、ただ私は殺生をしないではなく、殺さないということは、他を「生かせ」ということであることに思いを至らせることなのです。

「生かす」は布施の心です。布施とは施すこと、笑顔やあたたかい言葉、そっとさしのべる手、そして、あなたも私も他の生命をいただいでしかいのちを保てない同じ悲しみを背負って生かされているという思いやりです。施しの世界とは、もっとも人間らしい穏やかな世界なのです。

「自分ファースト」は人間の驕りや愚かさの現れです。そのことがすべての生命を危うくしていることに気づかなければなりません。

どのように豊かになったとしても、私のいのちは私だけのものではなく、次の生命のためにお返して終えていかなければならないものです。そのことに導いてくれるのが、自分につながる量りしれない多くの仏さまの願いなのです。 合掌

奏庵法座

日時
2月26日(日)
午前11時～

「真宗宗歌」
正信偈
住職法話
「恩徳讃」
～*～
おとき

春一番が吹きましたが。冬と春を行きつ戻りつしながら季節が移るこの時期は体調管理が大変です。「今年も早や…」という感慨も今月くらいまで、いつものように過ぎるがままに生かされていく日々ですが、そのことの「ありがたさ」は増していきます。そんなお互いが集って膝を交えてお念仏を味わうひと時をうれしく思います。どうぞ気をつけてお参り下さい。



信心の華

現代の妙好人榎本栄一の詩

『一味の流れ』

私に流れる命が
地を這う虫にも流れ
風にそよぐ
草にも流れ

『百年』

百年たてば
自分の子も孫もなくなり
泥まみれの私の生涯を
知る人もなくなるだろう
しかし そこに草が繁り
虫が生きていたら
私はうれしいな

『誕生無数』

命ある海から
無数の生物うまれ
大地から 植物うまれ
人間の奥底から
光あるもの次々に生まれ

お断り

時々コンピューターの不具合により、一度消去した住所が混じってしまうことが発生します。奏庵からの便りが必要でない方は、お手数ですが今一度お知らせいただければ幸いです。

尚、奏庵の封筒に印刷されているEメールkamakuranetは現在は使われていません。寺報「かなである」に載せてあるものが現在のものですのでそちらにアクセス下さい。

住職

カナダ暮らしから唯一持ち帰ったストーブを焚き、薪に絡まる美しい炎を眺めていると、語らずもながに火の起こし方の話になり、我々がついこの間までしていた「火を起こす」という作業も、今では、火は「つける」であって「起こす」と表現をしないものになっているのかも気づかされた。■子供のころ、火力を安定させる大きな薪に火が移るまでに、シバやカラケシ炭を無駄遣いしたこと、焚き口で火の番をしながら小さい斧で割って作ったシバが積み上がった満足感。経験した者には半世紀以上を過ぎてもついこの間に思えるものも、時代にとっての50年は十分昔のことなのだろうか。■そんな話をした次の朝の新聞に、【無いときは無いなりに生きてきた 運転免許と君の存在】という詩歌を見つけ、タイミングの良さに和まされた。歳とともに出来なくなることが増えていく戸惑いの中で、そういうものがなくても生きていた思い出を励ましにしている人に自分も励まされる。■それは強がりか自分への言い聞かせに過ぎないかもしれないが、歳を重ねることで得るささやかな智慧だ。生きてきた経験が失っていく穴を埋めてくれるのだ。それは、生きるということ、自分の本分をやり遂げるということの原点に立ち返らせ、しぶとくもなるが、それゆえに次々試練も味わなければならない。■私も癌の治療中、一年近く声が出なくなることを経験したが、このまま声が戻らず生かされたら、お経や説教が出来ない僧侶としてどう生きていくかを考えさせられた。そして今度は運転が出来なくなった。それは実際の不便以上に気持ちを弱くもさせたが、試練はすべて、僧侶である以前に人としてのいのちのある限り全うするしかないことをことを受け入れさせてくれる。老い方も人それぞれだが、先立って往った友や兄姉も含めて仲間に事欠かないのは心強く嬉しい。 Norimaru